



隆季集

特別
^ 4
8180



貴 4
8180



隆季集



大い書のあつれ
おすりてかゝるりく
ふと物りて



天竺のくるとの目録に
おすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく

おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく

おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく
おなすりてかゝるりく

< 2012-319 >

三張娘のわろひをさすうすいれ處より起る雲の影いさ

野、處

日方どいまめあやうらのみくわ 本、リ、マ、

朝日と雲の影のさめより雲そのしるゝみ代のお雲
煙しく四角は山きり、處はわろの木はめもえぬるん
物ほひおほろよ處は獨ふせは昔も残る月、のあ
るわー岩は陰を影く雲よーころる春は山人
海のすすめころる

みり物い雲の處のころるく消ぬや残る雲は白雲
何ーこの雲を

山は雲よりしるゝ物雲雲はあれは色増しりき

野、雲の雲を

わーこの影の影しるゝ雲のく雲雲摘ふま雲はさり

浦は、雲を

須磨はあはれさるり神の浦波は雲の雲の雲は
いん雲は雲のあはれ理はわろろのなす影をさあかん
雲消る雲のやけ雲雲はあなてぬ煙はものるの草

子、日

わーわきよは日の影よまなへいりし雲はしるゝれ雲
いん雲

あまの橋をたぐりてさるるをたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
竹を

一とすの縁をたぐりて松の葉をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
孫を

月子形をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
木か—

清き水たぐりてさるる目もあやうき船縁なる
清き

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
孫を

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

孫を

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

孫を

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

孫を

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

孫を

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる
あまの橋をたぐりてさるる目もあやうき船縁なる

わさ

うさぎを枕にぬかしも寝る花の夜そよめる
暁嘗

夕陽の月影をうさぎの白ひの膚に映す
さびしき雲をうさぎのひきき消さうさぎを

物嘗

嘗は夢のさし草のうさぎのうさぎのうさぎ
吾中嘗

路を消さうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
嘗

まるふにぬかしうさぎの枝のうさぎ

わさ

嘗は岩の葉もうさぎのうさぎのうさぎ

田草嘗

すさむるわさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
嘗

わさぎをうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

あーこの嘗

我宿子わさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

里嘗

負人の妻よこころをわらわすは思はるる梅の香
竹の葉は鳴ひるる

枝とてうしろの雪は雪は花の匂いも

梅の香はけり

春はあはれぬ籬の黒竹の花より梅の香はけり

松上雪

わらわの妻よこころをわらわすは思はるる梅の香

簾梅

雪のふりしは白の雪は梅の匂いも

木を

梅の香はけり

里梅

咲く花の匂いも梅の香はけり

梅梅水

何となく花の香は梅の匂いも

梅

白くは梅の花の匂いも

梅梅

梅の香はけり

梅

吾妹哭う神や福つる梅花あやき秘のひよ白うらん

梅風

大い梅をく梅咲心の夕風やわらうれぬいあならん

梅葉の松

梅の香はうつろし梅の神花のゆるいあき春のいん

垣根の梅小雲はうらんあならん

春の夕風ぬの梅いあならん白うらんあならん

毒香

及の梅の香はうらん夕風やわらうれぬいあならん

庭梅

いくあうんを思ひたる梅うんなれてあなぬ若梅え

夜梅といふあならん

あみされいあならんあきと梅花うらんあならん思ひ月影

梅をよむらんあならん

こつてに下枝をくらん梅をあやき末のあならん

梅花意宛

雪や木とくに梅つるらんあならん梅の花うらん

梅花風神

あならんあならんあならんあならんあならん

梅の香

誘来る福の浦に在る梅香は白の袖に似て春風

若木梅

草ぬ人の海を渡る花の香は白の袖に似て春風

紅梅

紅の梅は白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

白梅

衣は白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

毒

影うらふ山に海を水とて夕月と白の梅のえ

完梅對雪

松と白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

閑庭梅

葉と梅の白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

折梅

梅の香は白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

梅

吹掃る雪の影に似て春風の香は白の袖に似て

梅の香は白の袖に似て春風の香は白の袖に似て

毎よせぬ春風がうらふ梅の香は白の袖に似て

野宿梅

すめり—志の屋のあけく草英吹—く風の梅播

たのぬ小梅の花笠糸—くくあう小あふぬ—くく
柳

くは川若浪をうく小柳をくくくまはあひん
川柳

河柳もくはをくくたをいめて思越あはれをく
柳

くくたのくくくあひんき柳のくきたんく人あひん
木な—くあひん

海をとり深く知くき柳の糸をばまは風を
古木柳

下菊のふく木は柳下もくく物うき春はあう
阿まあまのく極戸の玉柳—くくつ花の友—くく

隣家柳

くち風をくく柳は糸—くくくくくくく
柳夷水

見わくく浪は波たる池ありと道越てひくき柳の糸
あつ柳

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

堤柳

いそぎある堤めぐるまの池に堤の柳をさぐる

柳露

いそぎんとみきりにねみりまは柳の露の秋風

柳

まなほ柳のめいりまはるえいしや露まのさか風

岸柳

いそぎのまはるふもまはるまはるまはるまはるまはる

わさ

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

すれ

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

すみき

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

早蕨

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

わさ

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

路さわ

いそぎのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

古今地名

無語子巖

山翁のこころの山河巖れは春のしほをわたりて
こころ

子巖にもえぬらん雲のふ焼くはる人へかへん
わさ

紫のちりちり花雲のたふさく巖におらむは
無語巖を折くはるこころをわたりて

春の巖にたふさく花の体は雲の山人
巖を

忘るる水も春のたふさく打そぬる岩の子巖

無語さわか

山翁の衣のいろは紫のゆるりそをたふさく岩の子巖

昔神の巻

雲の上のこころ木も花をみのさうり花雲はあらん
道行人のこころは花のたふさく

花のこころ山翁花をいろは紫は花はる人へかへん
花翁のたふさく花をいろは紫は花はる人へかへん

花をいろは紫

みよはる木も山の花をいろは紫は花はる人へかへん
花をいろは紫は花はる人へかへん

桜をよみてはさきく保ちてあはれをいふすおまのいそ
をよむころを

あはれの花よりあま日数経くは秋の末よりよきあはれ
むる—んを

よすねえまはあはれはうらやまの夜に保ちて—まう
まよちうあはれをなれまを思ふものうらやまの夜に保ちて
花よりて保ちて—んを

よすねえまはあはれはうらやまの夜に保ちて—まう
まよちうあはれをなれまを思ふものうらやまの夜に保ちて
花よりて保ちて—んを

あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて
十

物部山咲るは花のあはれ—んをいふあはれは保ちて
あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて

禁中お花のんを

あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて
あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて

花のあはれ—んを

あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて
あまの今と標記を—んをいふあはれは保ちて

様をんまをの格きんわのまいしう新名をそとわ

名所花とりよんを

みづの花咲ぬしーその花をそとわのまいしう新名をそとわ

わるーしうり花

花をんまの山風吹時いそ波をそとわのまいしう新名をそとわ

毛のまをそとわの詠る面影をそとわのまいしう新名をそとわ

花

花をんまの根を花を咲ぬしう暗けしうり花をそとわのまいしう新名をそとわ

花を

花をんまの雪を花をそとわの荒をそとわの今いしう新名をそとわ

花をんまの格きんわのまいしう新名をそとわ

山花待

花をんまの詠やまのん初様を約するのしう新名をそとわ

年毎に来たりわんる様を雲の今いしう新名をそとわ

様をんまのしうり花をそとわのまいしう新名をそとわ

春はしうり花のしうり花

花をんまのしうり花をそとわのまいしう新名をそとわ

二月書

花をんまのしうり花をそとわのまいしう新名をそとわ

雑

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

雲雀

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

帰居を

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

春月

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

夕暮

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

山春

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

春月

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

夕暮

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

山春

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

春月

あはるをいふの事如書とよきあしをなすはすもや

夕暮

昔は花と月と見つゝ海とありは夏秋震の。在明の月

わな

月をすむ夜の中流れるはほいよる世の思の影

わな

天橋の道と海とけの露と夕月のあやもさうんんんん

善田

尾形田の鳥居は今を何ひやあふれあふらん田の景

春隆

たのめつらん昔は秋葉あつてえ侍をのわねのふ

苗代

花なれや苗代小田は標をくみぬさや向ふ昔は心風

三月花

たふあは形もなすともめまて今宵は昔は花はらん

夏

山家卯花といふとて

山猫は垣をに笑ふ卯の星はあおるよと惜しむらん

卯花巻の

一書とちの昔は花と月と見つゝ海とありは夏秋震の。在明の月

武家もく卯をね

卯花巻の

花のよもぎふゆふのうらをい消せぬ香のほろほろ
山家卯花

咲のうけの阿の卯花の成のなるうらうら
遠見卯花

うらうらの葉のうらうらと神のうらうらのうらうら
昔の葉のうらうらと神のうらうらのうらうら

うら花

卯花のうらうらと神のうらうらのうらうら
うら花のうらうらと神のうらうらのうらうら

卯花のうら

うら花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら

月前卯花

うら花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら

夢

卯花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら
卯花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら

意橋

卯花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら

わな

卯花の水のうらうらと神のうらうらのうらうら

菅葎

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

た

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

田中お苗

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

たあ

たのこもねのまふあまのこもねのこもね

わさ

おな

おな

おな

おな

おな

わさ

おな

おな

おな

おな

物部云

先づり逢ひくまを福をき時をいふ物き去年のゆき
おな

時をゆきとくまをぬ解のりいみとを社に待たうけ
おな

部云きはまはるやとぬいんあいらいふの夜まは一夏
月のあの時をいふ

さといぬ月よつれとや時をわら看とるあてまぬん
時を早傳

あまのい何言はう遠あめりその名昔も早ぬ時をい

雲外杜若

恨のらん里いり子時を写くあーをちぬひり

ぬ井部云

村をわたぬ流のりそめは愛の福をき本とまぬん

山色部云

世をうはふの心をわ時を昔の物よらひいり

晴時云

詠しき後うあらん晴をとるふの白れやまほし

杜若

これーつら物言あらん部云まこぬ心路をたうけ

杜鶴を捕まふ安といふこと

杜鶴おのゝきんをとりければく程安をいじりてはなり

暁時鳥

おとぎはくろ志のめよふ事くわの独おの祢え向ん

阿多中の一節と

詠へたきくらん時を安の白のいふこと

朝時鳥

あやふき時ほくはるぬいふのめいふこと

夕時鳥

たのめはるはくせくはるをれいふこと

杜雀

時をせよあも安のいふはくはるを安のねよ

いとう安時鳥

秋のよたのいふはくはるをいふこと

杜鶴

志とみ山風におろせく時を安のいふこと

待部

阿多中いふはくはるをいふこと

雀云たのぬこと

そことなる節をいふこと

子規待とくよと紙

曉になつてもあつたよとくよのよるをよとくよ

ねる—とくよ

打麻根まふよとくよのよるをよとくよ

あな—

時をねぬよとくよのよるをよとくよ

あ—とくよ

時を弾もよとくよのよるをよとくよ

吾同杜鰲

夜うよとくよのよるをよとくよ

時をぬれたとくよ

花あつたよとくよのよるをよとくよ

人傳時を

想つたよとくよのよるをよとくよ

ねる—

あつたよとくよのよるをよとくよ

あな—

あつたよとくよのよるをよとくよ

あな—

あつたよとくよのよるをよとくよ

浦よりたす。女月夜

こころをくはせしむるはなれ浦も一不とうたふの神
たふしうらや

女月夜 天女小松の管よりして浮ねのうらやうたふを
す。

女月夜 伊奈のさく系ね並く管よりすはたの池あり
たふし

女月夜 月よなをくもぬ狭捨山のありぬのこころ
しよよすのさみもたふし

女月夜 浦の海より中流へくまのさくはたの池あり

川女月夜

晴もぬ日数つれはみきの川淵へのさかき女月夜の
たふしうらや

女月夜 日数あはれは浦浪のさくはたの池ありぬの
たふし

女月夜 大川のさくはたの池ありぬのさくはたの池ありぬ
たふし

女月夜 川の流るるさくはたの池ありぬのさくはたの池ありぬ
たふし

さらさらと木をたふしぬは戸羅原の流のさくはたの池ありぬ

江よりぬ

まは浦や入江の層浪絶て危き路をすまよりぬれ
山川よりぬ

まみおの山田は時ふち絶てまよふまよひは
松よりぬ

女よりぬまは松よりぬまは松よりぬまは松よりぬ
橋よりぬまよふまよひ

浪絶てわたりぬまよひまよひぬまよひぬまよひぬ
松よりぬ

けはのま紫の袖よりぬまよふまよひぬまよひぬ
松よりぬ

危ちて

松子珠よりぬまよふまよひぬまよひぬまよひぬ
阿ちてぬ

あらしおの松のよいらぬまよふまよひぬまよひぬ
松よりぬ

松子の松よりぬまよふまよひぬまよひぬまよひぬ
松

松のまよふまよひぬまよひぬまよひぬまよひぬ
松よりぬ

松のまよふまよひぬまよひぬまよひぬまよひぬ
松よりぬ

照射

夏は夜も涼しき此麻のめを、もあつて何をせぬ程にけり
水鶏

天の戸を夜もすくぬかのけり、ん程さく明る夏の夜の
あなまはねとろすくふこと

たろくは林夕もさくゆる、くゆく水鶏のはらぬなり
毎子とすく水鶏

枝の戸はなすく、さくをなほさくゆく水鶏のさく
ぬり水鶏

明くは夕付もさく、く枝の戸ゆく夜もあなま
二十二

杜蟬

風おちくさく、さくをなほさくゆく水鶏のさく
夏はさみとくゆく海

淋るう夏はぬれ、くもりもく梢の蟬のさくゆく
表陰の蟬

推れ兼ふ地よく、くさくさくさくさくさくさく
夕まにさく

夕まにさく、くさくさくさくさくさくさく
夏は月

夏は月、くさくさくさくさくさくさく
夏は月

夏後夏月

夕立を略しぬはりのさるるうらむはゆふのあつた

夏草

夏草をみれば園意み不流りたる物井のたのびと草

水色納涼

夏に物色氣水末の氷をまじりて河に流す冬はちすれ

河色納涼

山に雲を流すはくもくはなはくはくはくはくはくはくはく

清寂

みづのしずかに流るるはくもくはくもくはくもくはくもくはくもく

六月清寂

夕風は衣まわりの清寂川を流るるはくもくはくもくはくもくはくもく

秋

秋のつとを

秋風をわきの葉をまじりて雲を流すはくもくはくもくはくもくはくもく

秋のつとを

はくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもく

秋のつとを

秋風をわきの葉をまじりて雲を流すはくもくはくもくはくもくはくもく

七夕

天の川をよもほり何れ物となく秋を契とめを深
く我に思ふはちの海せむと夕の秋をいふあり
とらふはなれなむ久しとの天の川誓きとらふ

秋田面

そのみよ岩の心程をまひと暮の秋のこおとを思ふ

層

阿蘇の山天の川花為招くと名付とえむとらふ
糸すし紀

神の寺尾をとりとる旅衣すも糸の程そし田舎
籠物とらふ

海と海の家とをなれ權れ夕のけいね花のわりのさふ

阿蘇の山

よもほり天の川花を招くと名付とえむとらふ

秋の山阿蘇の山を契とめを深

女帝花

とみなるおのなる風なむくも標の山を思ふ

野女帝花

秋の野女帝の山を契とめを深
ねがひを

おみどり一橋の秋の香花早ももの香のたまり

あし秋の香かきの香のたまりかきの香のたまり

荊薺

夕暮のお竹の秋の風家子梅の香のたまり

おたけ

あし秋の香のたまりの香のたまり

紫

あし秋の香のたまりの香のたまり

あし秋

風吹の香のたまりの香のたまり

あし秋

秋の香のたまりの香のたまり

萩

秋の香のたまりの香のたまり

萩

秋の香のたまりの香のたまり

萩

秋の香のたまりの香のたまり

萩

秋の風をよめる秋の風を恨そりてつばしのこゝろ
よのけ草

秋の風をよめる秋の風を恨そりてつばしのこゝろ
萩

若るこころはつげさ萩原をつゝまをこつゝまきほえ
女の花

かみおきこころはつげさ萩原をつゝまをこつゝまきほえ
とみね原

人のこころはつげさ萩原をつゝまをこつゝまきほえ
若るこころ

恒別一秋をよめる秋の風を恨そりてつばしのこゝろ

松者

くれこころはつげさ萩原をつゝまをこつゝまきほえ

松者

けなつゝ萩原をよめる秋の風を恨そりてつばしのこゝろ

女者

若るこころはつげさ萩原をつゝまをこつゝまきほえ

女の花

白雲わたる秋の女の花をよめるみよこころはつげさ

物居者

天原みくらををみる秋よりつらひぬれ神の夢
后は夢をくくく

玉梓のそり別すすかちしそりのあまふたはる后金
岩后

るらなる白首の友を忘るるはる岩越色はるしき
初陣后

后后を忘るるそりおれそり後にはるるる
遠陣麻卒

大江山麻のきをくく史由くくはるあつ後をくく
夜麻

想いする里人の秋の夜に花はるるの声
さきりの力強き后尾をくくはるはる花をせん

山麻
備はあゝ夜秋のいふくくはるる

月
いひおれんをくくはるる秋の家常り別る月の影る

わたる
月の子をくくはる秋のあつ消くくはるはる

おちる
忘れさるるのね覚を秋とた神の涙は月をくく

わな

詠まはしむるはななりつらむる月影はさき
おね

彩もみまはしむる月影はさき

雪間月

秋の月影はさき

八月十五夜

この月影はさき

夕月

山の月影はさき

曉月

秋の月影はさき

山月

山影はさき

花月

花影はさき

月影

月影はさき

秋夜

秋夜はさき

五葉

あつちまてゆく庭に秋の影も
垣五葉

同じく庭の垣はふじの
山のまみ

木は葉も山影の
朝の五葉

年深きも葉はれぬ
庭五葉

新瑞なる五葉

菊

秋風の吹あそび
秋の菊
花はよもぎとわらわら菊の花
雪は深きと知る初霜の跡

九月盡

秋の夕小夜草

冬

たつきを

秋のけしき
雪は深きと知る初霜の跡
雪は深きと知る初霜の跡

瘴礼

おとすもいし 世に物を 枝のいしより ありきり 初時ぬる 枝
たる

ねつり長 枝のぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
行路時ぬる

思ふす子 時ぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
月お時ぬる

月お時ぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
はぬる

前へくく ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
阿し次 ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
浦時ぬる

きぬぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
松上時ぬる

ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
松葉

葉も木の 葉のぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる ぬるぬる
松同葉

きすのねいしとく積る霧の松下兼ふ付あるは花の那
筈

木好男の目彩のまじりては霧のさしに花のさしは
河のたれ

目彩の彩霧の霧の中をたうたりぬあさけのさしは
橋の上を

山川の朽く路をたれ橋はたれくわすそのあさけ
草の草

風はさかれば河をたれ花はたれさすけの家水は
庭の草

年ふとく庭のよもたうのみすれはさすけの家水は
吾

隙をたれ木曾の様の深くたけくは橋のよもたうは
木な

花のよもたれ花はたれ霧のさすけのさすけのさすけ
まじりては霧のさしに花のさしは
霧のさすけのさしに花のさしは

問答

言するは霧のさしに花のさしは
さすけのさしに花のさしは

旅書

舟よりす角田川をた降る舟より舟より舟より舟

社記書

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

書中書書將

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

社記書

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

書中社記

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

書

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

舟のありき

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

舟中社記

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

社記書

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

社記書

志め舟より舟より舟より舟より舟より舟より舟

歳暮

あけましてめでたきことなれども又もいふことなしとてめでたきことなれども
祝

いふ代のまゝおれおれと十寸後をいふおれおれと流れるころ
恋

あつさりおれおれぬあふおれおれと神々おれおれとあつさは
あつさりすくおれおれのぬおれおれとあつさはおれおれと神々
恋恋

おれおれのころのおれおれとあつさはおれおれとあつさは果るん
今いふやあつさはおれおれとあつさはおれおれとあつさは余りる

あつさはおれおれと

あつさはおれおれとあつさはおれおれとあつさはおれおれと
あつさはおれおれと

あつさはおれおれと

あつさはおれおれとあつさはおれおれとあつさはおれおれと
あつさはおれおれと

あつさはおれおれと

あつさはおれおれとあつさはおれおれとあつさはおれおれと
あつさはおれおれと

白雲をよみていさむのさそひと暮れしちかきしる

うららかにむすはるし神のしほむらゐる影さうな名の日影
暮はしむる花りそよの思草にさむらひの家のよすうや
暮はらうらむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの
うらむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの
不意の意

いさむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの
あふ意

さふむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの
三十四

月よみする意

思ふよ輪倉山の嶺の月よみのまきあふしけいしんたのしんたの

意

むすむの暮に何うに磨ん現したしあるぬさうらむ

ねる

暮はらうらむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの

思意

えむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの

ねる

いさむらひのしんたのしんたのしんたのしんたのしんたの

おな

夏よて是婚しりて守院りて傳へきよりハ杉塔りきん
うらむるく彩もやとこしきく神の候乃まを月もはとそん
あきしけし朽るん神の候もさるぬけ花の雲ともすか
み一時ハ意傳へしれハ文られの

いもすみこと傳ふか

大隆季集 大京亮皇孫之奉令
備用写 後考也

于時明應二年林鐘甲旬

尚保在判

諸家傳補任云降孝權大納言正三位云々
頭孝四代孫四條權大納言正三位藤原降孝母加賀守
高階宗章女
夫木抄ニ歌多ク入レリ

文久三年十一月四日写之

みねのちのち

